第8回

保育の質を高める

園内研修〈2〉

「木育を通して」

～子どもたちのこころとからだを育むために～

福井県・社会福祉法人 めぐみこども園 園長　中戸　華恵

なかと　はなえ
保育の専門性の向上に努め、子どもたちの笑顔を育む「子ども主体」の保育をめざし、日々研鑽しています。

全国初の木育ルームの設置

当園は、福井市の西部に位置し、周辺には2018（平成30）年の福井国体のメイン会場となった県営運動公園などがあります。2015（平成27）年度に幼保連携型認定こども園として名称を変更し、165名の子どもたちと40名以上の職員が在籍しています。

園庭

「輝くいのち、つながる心～生きる力を育てる木育～」を当園の保育・教育の柱としています。園舎は、国産総ヒノキのウッドデッキ・テラスや芝生を備え、保育室は100年杉の無垢材を床材に使用しています。また、全国初当園オリジナルの木育ルームを常設しました。ヒノキのたまごプールやグッド・トイと呼ばれる良質な国産おもちゃで多様なコーナーあそびが展開され、子どもたちが木の香りを感じながら、ゆったりとあそびこめる空間です。

こころの栄養

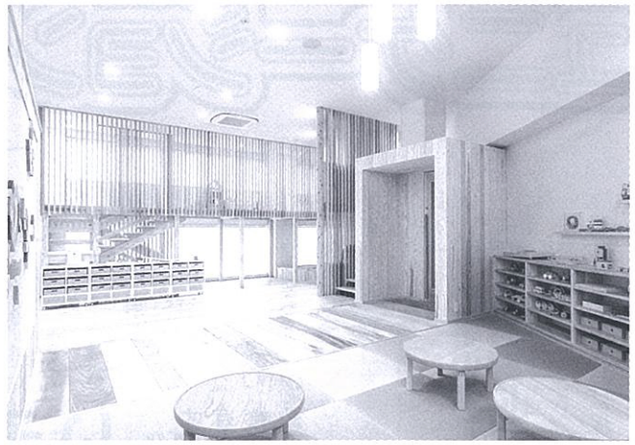
乳幼児期の「木育」とは、木に触れて創造力や考える力、好奇心を刺激し、生きる力を育む土台をつくることです。「自然と人とのつながり」から、まず子どもたちの情緒（こころ）の安定、次に、感謝の気持ちや物を大切にしようとする心の育ち、そして自信や達成感を育むことを目的としています。

家庭ではできない、本物の木に触れて子どもたちがあそびたくなるような環境を整え、それを継続するために、保育者全員が保育のスキルを高める意識化を図っています。

木育を理解し保育者間で共有する

木育への理解を深め保育実践でその活用を図るため、職員全員で研修を進めています。

まず、木育担当者を決め、新任・パート職員を対象にした木育の基本的な研修、園外から講師を招いて自然体験や生態を知る研修、木の「あそび方」を学ぶ研修、おもちゃあそびに対する固定概念をはずすための導入から制作に至るあそびのプログラム研修など、多様な研修を実施しています。



木育ルーム

大切なのは、その研修内容を「現場で実践・継続」していくことです。保育の改善・充実の取り組みを進めていくうえでは、職員間の対話を通じて、自園の理念や現状・課題に関する共通理解を図るようにしています。そこで「可視化」の一環として**「保育の実践のようすをビデオで撮影し、職員間で公開保育を行う」**ことに力を入れています。

子どもの言動の意味や育ちのようすを多角的にとらえることで、子どもの興味や関心に応じた環境構成などの援助の方法を考えます。ビデオを見ることから学ぶことは多く、職員間の対話が生まれ、子どもの姿が見えてくるようになりました。多様な視点からの意見を取り入れることで、自身の考え方や保育を見直し、新しい着眼点や柔軟な考え方が身についてて、クラス単位の保育が「みんなでみる保育」となりました。

さらに**「写真と付箋を使用して、子どものあそびを広げる」**研修にも取り組んでいます。ひとつのテーマに沿い、写真を見ながら保育者同士で100通りのあそび方を考えて付箋に書き留め、分野ごとに区分けしていきます。これにより、保育の広がりがもてる見方・話し方になり、保育者自身にも意識の変化がみられ、意欲的な実践へ結びつけていきます。

戸惑いながら始めた木育でしたが、保育者の小さな気づきを園全体の課題として、共に話し合うことで保育の内容が深まり、保育者の意識の変化も身近に感じられることを嬉しく感じます。

木育の今後の展望

保育ニーズが多様化しているなか、私たちが「変わらず大切にしていること」は「人」です。木育では、「おもちゃは、人と人をつなぐ最高のコミュニケーションツール（道具）」といわれています。子どもたちが、木々に興味・関心をもち、見て、触れて、においをかぎ、あそび、継続的にあそびを深めていくためには、身近なおとなの力が必要不可欠です。

これからも、保育者と保護者が共に学び、園でも家庭でも木への興味・関心を深めるよう取り組みたいと思っています。そして「対話」や「ドキュメンテーション」を重ね、信頼関係を築いていくことが「子どもの最善の利益」につながると考えています。